境目

札幌市医師会
伏見西線いしかわ眼科
石川　　太

晴れと雨の境目を見たことがある。それは父と行った恐竜展の帰り道、信号待ちのほんの数分の出来事。赤信号の向こう側には雨が降り始め、こちら側はまだ晴れていた。降り始めの雨粒が彼方のアスファルトを灰から黒に変えて此方との境界を引いてゆく。観てきた肉食竜の巨大なレプリカの印象とあいまって、世界に対する畏怖を幼心にも想起させたその光景を今でも鮮明に覚えている。

境目と言えば、小生のクリニックは札幌市中央区と南区の境目近くにある。開業以来、自身のクリニックの診療に加えて毎週木曜午後に南区の病院で網膜専門外来を担当しているのだが、境目を跨いだそれぞれの外来から伺える世情が違っていて興味深い。

当院では開業当初より小児の受診が多く、小児眼科を苦手にしてきた小生にとってこれは思わぬ誤算であった。早々に小児眼科を教科書、学会、講習会などで勉強し直すことになった。そもそも小生が小児眼科に一度も配属されなかった原因はおそらく体が大きく強面に見えるためである。知識は補えても容姿はどうにもならない。患児に泣かれてしまえばじっくり診させてくれないばかりか、所見は不明瞭、眼脂などの検体採取不能と正確な診断は難しくなる。結局、今でも泣かせぬように診察することに最も苦心している。このような話を南区の出先ですると、この病院では小児の受診がほとんどないと言うのである。遡って電子カルテを覗いてみると、なるほど小児の受診が全くない。それどころか60歳未満の受診もほぼ見られない。病院や科の特性もあるのだろうが70～90歳の高齢患者ばかりで初診の割合も非常に低いのである。

札幌市の人口動態を調べてみると、札幌10区の中でも中央区は人口増、南区は人口減が著しいとある。ドーナツ化現象の巻き戻しの都心回帰現象が00年代から続いているという。小生が目にしていた光景はまるで少子高齢化進度の境目のようである。少子高齢化を雨とするならば、この雨はやみそうにない。専門家曰く、ヒトのライフサイクルは変わらないので、この雨が降り続くのは確定した未来であるという。さらに2025年からその雨はより激しくなるとあらゆる識者が指摘している。特に北海道の場合は雨が雪に変わると言うべき予測だ。目を閉じて未来に思いを馳せてみる。冬の時代なのは間違いない。かつての恐竜のごとく時代の変化に対応できずに滅びてしまわないようにしたいものである。

光陰は矢の如し

旭川市医師会
旭川圭泉会病院
渡邊　泰男

令和元年６月、古希を迎えてしまった。

方々からおめでとうと言ってメールが来るが「何がめでたいんだ、俺は心身ともに衰えを感じて、死ぬときのことを考えているんだ」と返信した。

一方では「いつまでも長生きしてください」というメールも来る「何を言ってるんだ、俺はまだまだ老いぼれていないわ」という返信もしている。

ああ言えばこう言う素直になれない老人に成り下がっているようである。

介護保険や産業保健が始まったのがちょうど20年ほど前のことだろうか、それぞれの研修には大勢の先輩が参加していた。産業保健や介護保険が医業収入を増やしてくれるだろうと期待もあったのだろうが期待は大きく外れて、最近は研修会参加者は少ない。あの頃60歳台の人は80歳を超えてもいるだろうから、既に参加できなくなっているのかもしれない。

いま自分も高齢者になってしまっているが、いまだに介護保険や産業保健などの研修を受けている。研修会場を見渡しても自分より高齢で研修を受けている人はいないように感じ、何かしら不安を覚える。介護保険、産業保健、学校保健とせめてもの社会への恩返しと思い、来てくれ手伝ってくれと言われればどこへでも行くようにしているが、それもあと何年かすれば定年を迎えるようである。いくらこちらに気持ちがあっても、相手にとっては老人に診てもらうのは不安だろうと理解もしている。

最近のこと。学校健診で気づいたことは、文化部だと思っていた吹奏楽部の子供たちに腰痛が多いことであり、おそらくは部員たちはことごとく腰痛を持っているのではないだろうか。軽いとはいえ、重心から遠い所に楽器を支えていると腰にはそれなりの負担になるようである。腰痛を訴えることなく吹奏楽を楽しむための普段の予防策として、今後は筋トレやストレッチなど理学療法士とともに学校へ出張ってリハビリテーションをする予定にしている。

もう今年も半分が過ぎてしまったが、来年の健診までには腰痛を訴える子供たちが少なくなっていることを願っている。きっと、来年春の健診も私がやっていることだろう。